41-93

萬葉集講義 巻一

佐々木信綱

緒言

題號の事　萬葉集といふ題號につきて兩說あり。一はよろづの言の葉の義とし、一は萬世の義とせり。加茂眞淵翁の萬葉考には、こを萬葉集といへるは、萬は數の多かるなり、葉は言にて、歌をいふぞと荷田大人いはれき。或人は、から書に、萬葉は萬世の意なるによりつれど、こゝは字を借りしのみあり。葉に歌をよせずば、何を集めたりとか聞えずとあり。又藤原雅澄ぬしの萬葉集古義には、萬葉い萬世の義にて、其証は仁明天皇令義解を天下に施行し給へる詔、又日本後記に延暦十六年二月續日本紀を撰び成されたる上表、古語拾遺などに、萬葉とある、これらは皆此集よりやゝ後の事なるすら、萬世の義にのみ用ひたるを考へ合すべし。されば長く萬世の後まで朽せず傳はれとて、しか名づけられたるにぞ有りけるとあり。此にことわりある說なれば、人々の取捨にまかす。

撰者の事　此集の撰者につきて、昔より諸說あり。仙覺抄には、橘諸兄公の撰ぶ

家持卿の續撰したるなりといへり。うは榮花物語にも、諸兄公の撰び給へるよし見えたれば、古くよりしかいひ傳へたるおるべし。又契冲阿闍梨は、今此集の前後を見てひそかに是を思ふに、家持卿、若年より古記類聚歌林家々の集まで殘らずこれを見て撰びとり、うの外昔今の歌、見聞に從ひ、或は人に尋ね問て、漸々にこれを記し集め、天平寶字三年まで記されたるが、其後とかくまぎれて、部類もよくとゝのへられぬ草案のまゝにて、世に傳へりたるなりといはれたり。此說いとおだやかにおぼゆれど、猶定めいひがたければ、こも見ん人の取捨にまかせん。

編次の事　萬葉考に、卷々の體古き新しきあり。うれのみならず、年月の次もいと亂れて見ゆとて、卷のついでを改めわかちて、萬葉と家々の家集とに定められたり。されど古義に、しかせんず大方正しからん。然れどもしか改めんは中々に私事なり。さるはもときよく撰べる集ならず、唯よりくるに從ひて寫しとゞめられたるまゝに、隨筆などいふものゝ如く、假に一二を記しつゝ、更に改め正す事もなくして、やがて其まゝに遺しおかれたるものと見ゆればなりといはれたるなん、よろしくおぼゆる。

訓點の事　此集に訓點を施したるに、古點、次點、新點の三あり。古點とは、村上帝の

天曆年中に、源順、大中臣能宣、清原元輔、坂上望城、紀時文の五人に詔し給ひて、梨壺にて訓点を加へしめ給ひしをいひ、次点とは、大江佐國、藤原孝言、大江匡房、源國信、源師賴、藤原基俊等の各訓点を加へられしをいひ、新点とは仙覺律師の訓点を加へられしをいふかくつぎ〳〵に博士たちの訓点を加へられしかば、今は大方は解得るやうにありしは、實にてよなき功績にこそ。

部立の事　此集は、卷毎に部を立つること聊かのさがひはあれど、おほむね六種に部をわかてり。一には雜歌、二には相聞、三には挽歌、四には譬喩歌、五には四季、六には四季相聞なり。この六部の外、羇旅、離別、問答等の類あれど、別に部をたてず、右の六種の内にをさめたり。代匠記に、雜歌は後々の勅撰に、雜部とあるに同じ。相聞は贈答して思をのぶるなり、後の戀部にあたれり。十に六七も男女の情をのべて、其外は君臣父子兄弟朋友にわたれり。挽歌は後の哀傷なり。譬喩歌ハ物にたとへて意をあらはすなり。四季歌は後世に同じ。四季相聞は第八第十の兩卷に見えたり。こを相聞に合せば、惣して五部ともいふべしと見ゆ。

本集書式の事　春登上人の萬葉用字格には、八類にわかち、天野信景ぬしの擯尻には、四種にわかたれたり。この講義につきては、えうなければ省きつ、

さて本集は、史學ををさむる人の、必ず見るべき書にて、よくくりかへしよみて深意のある所をさとりなば史學を益せん事いと〳〵多かるべし。加茂翁云、すべて日本紀をはじめ御代々々の國史には、文飾多くて實を誤れるもの少なからず。且もとよりの謬傳を其まゝに記したるもありて。これによりて其事實を知らんは、いとかたき業なり。然るに萬葉の歌は、其時々の人の喜怒哀樂の情に發したるものなれば、いづれも實事なり。故に其歌を以て其人其時の事實を証するに足れりと。實に此言のごとし。然れども本書を撰びしは、いまだ假字のひらけざりし時代なりければ、專ら眞字假字を用ひん事頗はしきに堪へねば大方音訓義讀をまじへ、或は戯書せし所なども多あり。つぎ〳〵の博士たち深く考へて、訓點を旋されつれども、猶解得ぬふし〳〵すくなからず。されば初學の人々は、唯かたき物と思ひなし、手をだにふれずして、高閣につがねおくこといとも〳〵くちをしきわざなり。おのれ常におもへらく、後々の勅撰の集のごとく、本書をも假字もて書き改めたらんには、よみやすくいとたよりよからんを、そも全部を物せんはたやすからぬわざなれば、短歌をだにと思へど、これはたいとかたくして猶ほ物せぬを、今回この講義を物するにあたり、年頃おもひわたれるさまになし試みんとて、後撰集以下の体裁にならひて、書きあらためつ見ん人々その心してよ。

此集を註釋せる書、萬葉集註釋、詞林采葉集をはじめ、いと多し。今この講義を物するにあたり、其考説を參考取捨せしは、拾穗抄、代匠記、僻案抄、萬葉考、槻落葉、玉の小琴、略解、類葉抄、萬葉燈、古義、萬葉梯、楢落葉、美夫君志、私抄等なり。されど一々書名を擧げず。又多くは本文を省略せり。くはしくは本書につきて見るべし。

萬葉集卷第一

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代　大泊瀬稚武天皇（雄略天皇）

天皇御製歌

こもよみこ持ちふぐしもよみふぐし持ち
この岡に菜摘ます子家きかな名のらさね
そらみつ大和の國はおしなべて吾こそ居れ
しきなべて吾こそませわれこそはせとはのらめ

家をも名をも

一首の意　よき籠を持ち、うるはしき菜堀串を持ちて、此岡に菜を摘む子よ。汝が家をいづこと告げよ。名は何といふぞ。この日本の國内は、おしなべて朕こそ治めをれ、いづくのはても朕こそ君としておはしますなれ。さて朕こそ、汝が夫として、その家のありかをも名をもしか告げきかせん。汝も朕にその家も名もきかせよとなり。

初二句代匠記に籠の字を神代記にかたまとよめるによりて、かたまもよみがたまもちと訓むべしとあれど、猶舊訓のまゝに、三言四言の句と見たる方まさりておぼゆ。さてみこのみは美辭にて、籠をほめていへるなり。下のみふぐしもおなじ。ふぐしは、菜などほりとる串をいふ。二つのもよは歎辭にて、ともに何を重ねいへるなり。菜つますは摘むをのべていへる古言のさまなり。家きかなを考略解等に家のらへと改めたるは、中々にわろし。名のらさねは、のちせをのべていへるなり。そらみつは枕辭なり。しきおべては、おしなべてに意同じ。結尾われこそは云々は諸説くさ〳〵あるが中に、最もよしと思へる説にしたがへるなり。

高市崗本宮御宇天御代　息長足日廣額天皇（舒明天皇）

天皇登香具山望國之時御製歌

大和には　むら山あれど　とりよろふ　あめのかぐ山
登りたち　國見をすれば　國ばらは　煙たちたつ
うな原は　鷗たちたつ　うまし國ぞ　蜻蛉洲

大和の國は

一首の意　大和の國には、山々あまたあれど、とりわきて山の姿の足りとゝのへるこの天の香具山へうちのぼりて、遠く眺望をすれば、國原村々には烟たちのぼり、海原のごとき埴安の池には、鷗の立ちさわぐあゞ、さてもよろしき國ぞ、この大和の國はとなり。

むら山は群山にて、四方に群りめぐれる山をいふ。とりよろふは山の形の足りとゝのへるをほめ給へるなり。香具山は大和十市郡にあり、國原海原の原は、廣く平けき所をすべていふ詞なり。さて海原は、香具山の麓の埴安の池いと廣く見ゆるをしかよみ給へるなり。

天皇遊獵內野之時中皇女命使間人速老獻御歌幷短歌

やすみしし　わがおほ君の　朝には　取り撫で給ひ

夕にハ　い寄せ立てし　御執しの　あづさの弓の
なり弭の　音すなり　朝獵に　今たゝすらし
夕獵に　今たゝすらし　御執しの　あづさの弓の
なり弭の　音すなり

一首の意　わが天皇の、夜あくれば手に執り撫で給ひ、夕になれば物へよせかけ立ておき給ふ御持料の梓弓の弓弭の玉鈴の音すなり。わはれ朝獵に今か出立ち給ふらし。夕獵に今か出立ち給ふらし。御料の梓弓の弓弭の玉鈴の音すなるはとなり。

やすみしゝは枕詞なり。朝には夕には、終日といはんがごとし。とり撫で給ひは考に、神武天皇天璽とし給ひしもたゞ弓矢なり。是を以て天下を治め知ります故に、古の天皇是を貴み愛でますなりといいれたり。いよせのいは發語にて、よせたてしい、物へ寄せかけ立ておくなり。御とらしは弓は手に執り持つ物なればしかいへり。俗に御持料のといふが如し。朝獵夕獵は必ずしも時刻にかゝはらず。なりはずは、古は弓弭に玉をまき鈴を懸けつれば、手に取る毎に鳴れば、いへりと玉小琴にいへるに從へり。

反歌

みじか歌とよむべし。こをかへし歌といふといへる說はわろし。さて反歌は長歌の一首の大意をつゞめ、あるはいひもらしたる事をよみうふるものなり。考に長歌に短歌をそふる事は、古事記にも此集にも、いと上つ代には見えずして、こゝにあるは、此しばし前つ頃よりやはじまりつらむといへり。

たまきはる內の大野に馬なべて朝ふますらむその草ふか野

一首の意　內の大野に馬をのりならべて、朝より鳥立をふみ立て給ふらん、その草ふかき野をとなり。

たまきはるは枕詞なり。內の大野は大和國宇智郡の御野なり。ふますは踏むを延べたるなり。さて朝ふむは、鳥の隱れをるを朝踏みたつるなり。

幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌

霞たつ　長き春日の　暮にける　たづきもしらず
むら肝の　心をいたみ　ぬえ子鳥　うらなげをれば
玉だすき　かけの宜しく　遠つ神　吾大君の
いでましの　山城の風の　獨をる　わが衣でに

朝よひに　反らひぬれば　益荒雄と　思へるわれも
草まくら　旅にしあれば　思ひやる　たづきをしらに
網の浦の　海水少女らが　やく鹽の　思ひぞやくる
わが下ごゝろ

一首の意　長き春の日の暮いてたるたよりもしらず、何となくさびしくて、心の苦しきによりて、心の内にてうち歎きをるに、疾く都にかへらんと思ふ心にかなひて、大君の行幸の御伴にたちて、かくたゞ獨をるわが衣の袖に、故郷より山越にふきくる風の、朝夕にしきりに吹かへりふきぬれば、いとゞたへがたくて、女々しき心は持たじ、ますらをの心たけくと思ひをる我も、かく旅にあるなれば、思ひをやりはらさむたよりもなさに、わが心の中に思ひてがるゝ事よとなり。

霞たつひら肝のぬえ子鳥玉襷遠つ神草まくらは、ともに枕詞なり。たづきはたよりといいんが如し。うらなげはうらは心の意、なげは歎きにて、心の内になげくよしなり。かけのよろしくは、遠らひぬればといふへかゝるにて、旅にては早く都へ歸らん事をねがふに、うちかなひて、風のふきかへるとなり、山ごしの風は故郷より山を越してふきくる風をいふ。思ひやるは、思を遣り晴らすにて、遣悶の意なり。

後世の想像を思ひやるといひて、推量ることをいふとは、いたく異なり。しらには知らぬによりての意、網の浦の云々三句は、思ひぞやくるといはむ料の序なり。さてうの浦に海人どもの塩焼くを見て、我もかく思ひに胸をやくといひつゞけたるおりしたごゝろはうらといふに同じく、内心をいふ。

反歌

山ごしの風を時じみぬる夜おちず家なる妹をあけてしぬびつ

一首の意　山ごしにふきくる風の、時ならずいたく寒きによりて、夜な〳〵都の家にある妹の上を、こゝろに懸けて戀したふとなり。

時じみは非時をよみて、時あらざるをいふ。みは心をいたみ風をいたみ笘をあらみなどのみにて、俗に依てといふ意なり。ぬる夜は寢ぬる夜、おちずは俗にかけず殘らずなどいふ意にて、即ち連夜毎夜といはんごとし。かけては心にかけてなり、しぬぶは慕ふ意なり。

明日香川原宮御宇天皇代　天豊財重日足姫天皇（皇極天皇）

額田王歌

あきの野のを花苅ふきやどれりし宇治の都の假廬し思ほゆ

一首の意　秋の野の海を刈りて、屋根に葺きて宿りわりし宇治の行宮の假巷の、今に戀しく思はるとなり。

をばな　原本美草とあるを、元暦本にしか訓めるにしたがふ。宇治都は山城國宇治の行宮をいふ。本書左註に齋明天皇近江國比良浦に行幸の事見ゆ。其時の歌なり。

後崗本宮御宇天皇代　天豐財重日足姫天皇（齋明天皇）

額田王歌

にぎた津に船のりせむと月まてば潮もかなひぬ今はこぎいでな

一首の意　熱田津にて、船に乘らむと思ひて月を待ちをれば、潮もみちてよくなりぬ。いで今は漕ぎ出むとなり。

熱田津は伊與國溫湯郡にて、今三津濱といふ所なり。結句こぎいでなはこぎいでんといふに同じ。

中皇女命往于紀伊溫泉之時御歌

君がよもわが代もまらむ磐代の岡の草根をいざ結びてな

一首の意　君が御代も、わが命もともに長くしり守るならむそのしるしに、磐代の岡の草根を、いざ結びてむとなり。

君がよわがよのよは、ともによはひの意にて、即ち壽命といはんがごとし。しらむは、しるとは、神ずしるらむなどのしるにて、意ははからひ行ふ事、納受して守る事なり。磐代岡い紀伊國日高郡にて、今も岩代村ありとぞ。草根はたゞ草なり。結びてなのてなは、てむに同じ。さて草を結び松などを結びて、わが身の平安を祈りし事、古のならはしと見えて、さる事、次々の卷どもに往々見えたり。ずなはち二の卷に「岩代の濱松がえを引結びまさきくあらば又かへり見む」六の卷に「玉きはる命は しらに松がえをむすぶ心は長くとぞおもふ」十二の卷に「妹が門ゆきすぎかねて草結ぶ風ふきとくな又歸り見む」などこの他にもあるべし。

わがせこは假廬作らすかやなくば小松がもとの萱をからさね

一首の意　わが夫は、たびねすべき假廬を作らるゝなるが、もしふくべき屋根草のなくば、かの小松のもとにおひしげれるかやを刈り給へとなり。こは小松をとりに遊高萱などの生ひたるを見て、よみ給へるなるべし。

つくらすは、つくるを延べていへるにて、敬語とおせり。かやは屋を葺く草をいふ。かならずしも萱をいふにあらず。からさねは苅れをのべて、からせとなるを、又延べてからさねといへるにて、こも敬語となせり。

わがほりし野島は見せつ底深きあこねの浦の珠ぞひろはぬ

一首の意　わが見まくほりたりし野島は見せ給はりつ。はや思ふ事かなひたり。されど猶底ふかきかのあこねの浦にゆきて、うこなる玉を拾はぬがくちをしとなり。

野島は、紀伊國日高郡塩屋浦の南に、野島村あり。其海邊をあこねの浦といふ。淡路にも野島あれど。まがふ事なかれ。さて玉ぞひろはぬ、そこにゆきて見ざるを、珠貝などは海邊のものあれば、しかいへるなり。

右中皇女命は、すなはち間人皇女にて、孝德天皇の皇后なり。歌に君といひ、わがせといひ給へるは、皆かの天皇をさし奉れるにて、此時まだ位に即き給はざりし、前なれば、同道せさせ給へるなるべし。

中大兄命三山御歌

かぐ山ハ　うねびををしと　みゝなしと　あひあらそひき
神代より　あくなるらし　いにしへも　しかなれこそ
うつせみも　つまを　あらそふらしき

一首の意　女山の畝火山を、愛しきものと、男山の香具山は同じ男山の耳梨山と相互にあらそひたりき。さて神代より、女の上につきては、かくあるらし。古の代もしかあらそふものなればこそ、今現在の人も、女をかたみにあらうふ事ならむとなり。

うねびををしとは、諸注香具山を女山として、畝火をゝしと訓み、雄壯の意とするは、おだやかならず。木下幸文の亮々草紙に、畝火を愛しと訓みて、うねび山を女山とし、香具山耳梨の兩男山の、うをかたみにをしと爭へる意にとかれたる、いとおだやかにきこゆれば、今はその說をうべなひて說きたり。香具山は、大和國十市郡香山村の上にあり。畝火山は、高市郡畦傾村の上にあり。今慈明寺山とも、オム子山ともいへり。耳梨山は、十市郡木原村の上にあり。今天神山とも、梔樹多き故にクチナシ山ともいへり。うつせみは、世の枕詞なれど、此集にいたりては、空蟬とのみいひて、世の事ともし、現身の事ともせり。しかなれこそは、しかなればこその意なり。さてこそといひて、らしきと結ぶは、この集のところ、わづかにある一格にて、後世はをさ〳〵なき事なり。

反歌

あぐ山と耳なし山とあひし時たちて見にこしいなみ國はら

一首の意　男山の香具山と、耳梨山と、女山の畝火山を得むとかたみに相向ひ戰ひし時、大神の、國をたち出て、見におはしまし〻印南國原なりとなり。

あひし時は、男女の逢事にはあらず。こゝは二つの男山の爭ひて、相向ひ戰ひし時となり。こも亮々草紙の說なり。さてこの故事は、播磨風土記に、出雲國阿菩大神、大和國畝火香具山耳梨の三つの山の相鬪ふときゝて、諫めむ爲におはしましたるに、播磨國印南郡にいたりて、鬪止みたるよしをきゝて、乘り給ひし船をふせて、おはしたる所を神集覆形といふよし見えたり。其所は、今に神詰村といひて、岩船といふ物もありとぞ。名高き石寶殿の近邊なり。印南は播磨の郡名なり。さて印南國原といひ、いにしへは、初瀨國吉野國ともいひて、一郡一鄕をも國といへり。さて此歌考に、播磨國印南郡に往ましてよみ給へるなりとあるはよろし。幸文の、こは三山を見まして、故事をおぼし出て故事のまゝをよませ給へるにて、大和にての御歌なりといはれたるにしたがふべし。

わたつみの豐旗雲に入日さしてよひのつくよあきらけくこそ

一首の意　海上の旗のごとくたなびきたる雲に、入日のさしはえたるに、さて今宵の月夜の清明にくもりなくてあれかしとあり。

わたつみは、たゞ海をいふ。豐旗雲は、ゆたかに大きなる旗のごとく、横に長く棚引く雲をいふ。結句こそは願ふ意にて、明らかにあれかしといふ意なり。此歌本書左註にいへるごとく、反歌にはいとつきあし。ついでの乱れて入りしなるべし。

近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇（天智天皇）

天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌

冬ごもり　春さりくれば　なのざりし　鳥もきなきぬ
さのざりし　花もさけれど　山をもみ　いりてもとらず
草ふかみ　とりても見ず　秋山の　木の葉を見ては
もみづをば　とりてぞしぬぶ　青きをば　おきてぞなげく
そこしれもしろし　秋山われは

一首の意　春になれば、冬の間はなく聲もきこえざりし鶯、さては百鳥もなき、冬枯にさかでありし花もさきて、一入心もうきたつ頃なれど、山の木の茂きにより て、入りたちてもとらず、草の深きゆゑに、かきわけてとりても見ず、あたらすぐす事なるを、秋山はさもあらで、山の木の葉を見ては、紅葉したるをば、折りとりて賞

し、また青葉なるをば、さなおらおきてくちをしとおげく。それやがてこよなくおもしろき事よ。されば吾は秋山をあはれと思ふこなり。

冬ごもりは枕詞なり。なかざりし云々四句は、冬はなかず咲かざりし花鳥も、春になれば、あるは鳴き、あるはさくといひて、まづ春の愛すべき所をいへるなり。しみは、茂みなり。もみづをばい、かく用言に訓めるは、下のあをきをばと用言にいへるにむかへたるあり。もみぢと体言によむはわろし。しぬぶい、賞翫する意あり。結句は、われは秋山ぞといふ意にて、我は秋山に心をよすとなり。

額田王下二近江國一時作歌

うまざけ　三輪のやま　あをによし　奈良の山の
山のまに　いかくるまで　道のくま　いさかるまでに
つばらにも　見つゝゆかむを　しばくも　見さけむ山を
こゝろなく　雲の　かくさふべしや

一首の意　三輪の山をば、奈良の山の山の際にかくるゝまで、道の入り曲りたる所のこゝかしこ遠ざかりて見えずなるまで、くはしくよく見、幾たびも遠く見つゝ行かんと思ふ山なるを、まだ奈良山にもかくれず、道も遠くへだゝらぬに、心なく雲のかくすべきかは。なかくしそとなり。さて故郷のなごりを、この三輪山におはせてをしみ給へる御歌なり。

うまざけはをによしは、並に枕詞なり。山のまは山の際なり。いかくるゝいさかるのいは、ともに發語なり、道のくまとは、道の入り曲りたる所をいふ。さてこゝは唯こゝかしこなどいはんが如し。いさかるを、舊訓いつもるとよみあれど、荷田東滿翁のしかよまれたるにしたがふ。さかるは遠く離るゝをいふ。つばらはつまびらかの意、見さけむは遠く見やるをいふ。二つのをはなるをなるものをなどいふ意あり。かくさふべしやは、隱すを延べていへり。やは反語にて、たちかくすべしやはかくすことなかれとなり。

反歌

みわ山をしかもかくすか雲だにも心あらなむかくさふべしや

一首の意　故郷の三輪をかくのごとくも隱すこと、かは。奈良の山のまに見えずなりゆくか、あるは道のとはくへだゝりて隱れんはさてもあるべけれど、雲のたちかくすは、いと心なきわざぞ。せめては雲なりとも心あれかし。かくかくすべきかは、なかくしそとあり。

しかもかくすかは、しかもい斯のごとくもの意、かくすかのかは歎辭にて、かなの意なり。心あらなむのなむは願の辭にて、心あれかしとねがふ意なり。

みわ山のしげきがもとのさぬはぎの衣につくなす目につくわがせ

一首の意　三輪山の茂れる木の本の野萩の花の、摺れば衣に色のつくがごとく、に、人の目につくうつくしきわが君ぞとなり。

さぬはぎは、さはそへたるにて、野萩なり。古萩の花もて衣に摺れる事、集中の歌にあまた見えたり。つくなすは着くがごとくにの意なり。さて此歌は戀の意にて、上二首とはことなれば、反歌には似つかはしからず。されど同時の歌い、似つかはしからぬをも反歌に加へのする事、集中に例多し、但し考に額田姫王奉和歌と端詞あるべきなりといへり。結句にわがせとあれば、女の歌なる事しるし。されどたしかに誰ともさだめがたし。

天皇遊獵蒲生野時額田王作歌

あかねさすむらさき野ゆきしめ野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

一首の意　紫のおひたる野、しめおける野を、かゆきかくゆきつゝ、君の袖をうちふりて、女房どもにたはぶれ給ふを、野守は見ざるや、よも見ぬ事はあらじとなり。

あかねさすは枕詞なり。紫野は紫の生たる野をいふ。地名にあらず。しめ野は御獵したまはん料に、しめおきたまふ野をいふ。さて紫野しめ野といふも、皆蒲生野なり。蒲生野は近江國蒲生郡にあり。下の句、さかしまに句をおきかへて心得べし。額田王、天智帝の御妃なりし頃より、天武帝にしたしみ給へる故、かく女房たちに、戯れ給ふをうらみ奉りて、しかよみ給へるなり。

皇太子答御歌

むらさきのにほへる妹をにくゝあらば人づま故に我こひめやも

一首の意　うるはしき妹の上を、憎くゝ思ふ事ならんには、人の妻なるに、いかで我戀ひしたふべきかは。愛しく思へばこそ、常に戀ふるなれとなり。

むらさきのは、にほふといはん料なり。さてにほふとは、色の餘光ある事に多くいひて、うるはしきをいふ。妹とはすべて女をさしていふ。即ちこゝは額田王をのたまへり。人つまゆゑには、人の妻なるものをといふ意にて、憎くゝあらば何か戀ん。人の妻なるものをとあり。さて額田王は、天智帝のおもひ人なるに、天武帝のひそかに通ひ給ふ故にかくのたまへり。皇太子は即ち天武帝なり。

明日香清御原宮御宇天皇代　(天武天皇)

十市皇女參赴於伊勢神宮時、見波多横山巖吹黄刀自作歌

川のべのゆづいはむらに草むさず常にもがもなとてをとめにて

一首の意　この川のほとりの、あまたの岩の上に、草の生えずしてあるごとくに、わかき少女にて、常にあらまはしき事よとなり。

ゆづいはむらは、日本紀に五百筒磐村とかけり、數多く岩ぐものむらがりあるをいふ。こを一の地名として、ゆづはの村と伊勢名所拾遺集によめるは、いみじき誤なり。草むさずは、むすは生ひ出づる事をいひて即ち草の生えぬをいふ。さて上句は、常にもといはん料のみ。さるはうの岩むらのときはに草も生えずあるを見て、思ひよせたるなり。がもなは、がもは願の意、なはおげき辭にて、常にあらまはしき事よとなり。どこをとめは、どこは常にて、かはらぬをいふ。

麻續王流於伊勢國伊良虞島之時時人哀傷作歌

うちそををみのおほきみ海士なれやいらごが島の玉藻かりますらむ

一首の意　麻續の王は、海士なればにや、かく王なぐのをはしますべき所にもあらぬ伊良虞の島におはして、そこの玉藻を苅り給ふ。まことにいとはしきかぎりなる事よとなり。

うちそをはをみといはん料の枕詞なり。なれやは、あればにやの意なり。いらごが島は、三河國より志摩の答志の崎へ向ひて、海にさし出たる崎なり。昔は伊勢國に屬したりけむ。さて麻續王、日本紀には、罪ありて因幡に流されたるよー見えたれど、此歌にかくあるからは、伊勢なる事さだかなり。かゝるたぐひ史に合せて大に益ある事といふべし。

麻續王聞之感傷和歌

うつせみの命ををしみ浪にぬれいらごの島のたま藻をすと

一首の意　かくさすらへなぐらも命の惜しきによりて、浪にぬれつゝ海士と共に、このいらごの島の玉藻を苅りて、そを食物になしをる、あはれかなしき事よとなり。

初句うつせみのは枕詞なり。かりをすは食物ををしものといふに同じく、苅りて食すとあり。

天皇御製歌

みよし野の　みゝがのみねに　ときなくぞ　雪はふりける

ひまなくぞ　雨はふりける　その雪の　時なきがごと

その雨の　ひまなきがごと　隈もおちず　もひつゝぞ來し
その山みちを

一首の意　吉野のみゝがの嶺に、いつといふ時なく雪ふり、ひまもおく雨ふりしきるあるが、我はその雪のふり、雨のしきりて、いつといふ時もなく、いつといふひまもなきがごとくに、道のくまくものこらず、物思をしつゝその山道を來し事よとなり。木下幸文云、こゝ天武帝大事をおぼしたち給ひし時、はじめ吉野に入り給へる道のほどの御製ならむ、限なき御物思を帶びたまへる調、おのづからいちしるきをやといへり、さもあるべし。

初六句は、時なきがごとひまなきがごとといはむために、まづおけるなり。くまもおちずは、道の入り曲りたるくまくものこらずの意なり。

天皇幸于吉野宮時御製歌

よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ

一首の意　この吉野は、むかしよきうま人の、よき所なりとよく見さだめて、よき所ゞとたゝへおきし吉野なれば、あからさまに見すぐさでよく見よ、げにむかしのよき人も、よく見しゞとなり。

よき人とは、誰とはなけれど、いにしへありしうま人をさしてのたまへるなり、應神紀に、幸吉野宮とあるを見れば、いとふるくより宮ありし事しられたり、さてこれは、御供の人々にのたまひきかせまし〻御歌なり。

藤原宮御宇天皇代（持統天皇）

天皇御製歌

春すぎて夏きたるらししろたへのころもほしたり天のかぐ山

一首の意　時のまに春はすぎさりて、はやとく夏の來たるらしきゞ。かの見ゆる天のかぐ山のあたりの家には、眞白なる夏の衣をほしたり。さても月日のすぎゆく事のはやきことよとなり。

上二句は、光陰のたちやすきを感じ給へる大御心なり。下句い、宮より遠く見わたし給へる景物を、やがてよみ給へるなり。白妙いもと絹布をすべいふ名にて、妙は借字なり。さてこゝは白き夏衣をいへり。四の句、新古今集に、衣はすてふとあり。百人一首にもうれにしたがへるは、ともにひがことなり。

柿本朝臣人麿過近江荒都時作歌

玉だすき　うねびの山の　かしはらの　ひじりの御代ゆ

あれましゝ　神のことゝ　つがの木の　いやつぎ〳〵に
天のした　しろしめしける　そらみつ　大和をおきて
あをによし　奈良山こえて　いかさまに　おもほしめせか
あまざかる　ひなにはあれど　いはばしの　あふみの國の
さゞなみの　大津の宮に　あめのした　しろしめしけむ
すめろぎの　神のみことの　大宮は　こゝときけども
おほとのは　こゝといへども　はる草の　しげくおひたる
かすみたつ　春日のきれる　もゝしきの　大宮どころ
見れば　かなしも

一首の意　はじめ、畝火山のほとり橿原の宮にまし〳〵し神武天皇の御代よりこなた、生繼ぎ給ひし御孫のみことの天皇は、こと〳〵く皆御代々々次第々々に大和國にれはしまして、天の下を治め知り給へりしが、その大和をおきて、いかなるさまに思しめしてか、奈良山をうちこえて、都の外の片田舎なれど、近江國の大津の宮に都をうつし給ひて、天の下を治め給へりけむ。さてその天智天皇のおはしましし大宮大殿の跡ハ、こゝおりといひきけども、今はふるき都となり、お荒れ

はて、、春草のいとしげく生ひ、霞のたちて、春の日もくもり、いにしへのさまにもあらぬを、その大宮所のあとを見れば、いとも〳〵かなしき事よとなり。

玉だすきつゞの木のそらみつ青によしあまざかるいはゞしのさゞなみの百しきの等は、皆枕詞なり。かし原のひじりの御代は神武天皇を申す。日知は神代紀に月讀命夜の食國を知しめせとあるにむかへて、日の食國しり給ふは、大ひるめの命なり。これよりして、天つ日嗣しろしめす御孫の命を、日知と申し奉れり。後世唯聖の字にあつるはたがへり。殊に僧をひじりといふは、昔の意にあらず。神のことゝは、天皇の御世ことゝく皆の意なり。奈良山こえては下の近江の國といふへ、句を隔てゝかゝるなり。おもほしめせかは、思し召せばかを略きたるなり。ひなゐは都の外をいふ。天の下しろしめしけむすめろぎの云々は天智天皇を申す。大宮は大殿は云々といふは、唯詞のあやをなせるのみ。宮といひ、殿といふも、異ならず。春日のきれるは、春の日の霞にくもりへだゝれるをいふ。春草の以下は、大宮の荒廢して、さだかにわかぬを、かくおほめかしいへるなり。

反歌

さゞなみのしがの辛崎さきくあれど大宮人のふねまちかねつ

一首の意　うのかみ宮人たちの船遊せし志賀の辛崎は、昔のまゝにかはらでありぞ、今はふるき都となりはてたれば、大宮人のあそぶ船のよするやとまてど、待ちも得ずとあり。

さきくあれどは、何にてもかはらであるを、幸くあるといへり。結句は志賀の辛崎の昔のまゝにかはらずして、再都となりて、大宮人の御舟こぎくべき世を、まちをれども、今にえ待ち得ざるよしなり。

さゝなみの志賀の大わだよどむともむかしの人に又もあハめやも

一首の意　志賀の大わだよ。いつまでよどみてまつとも、昔の人に又あはむや、逢ふ事はあらじとなり。

大わだは、入江の水のまはりてめぐるところをいふ。わだかまりてめぐる意なり。

さて足代弘訓翁云、上句はよどむまじき志賀の大わだは、たとひよどむ事ありともの意にて、集中五の卷に、まつら川七瀬のよどはよどむとも我はよどまず君をしまたんとあるに同じといはれたり。

高市黒人感傷近江舊堵作歌

いにしへの人にわれあれやさゝなみのふるき都を見ればうなしき

一首の意　我は古の人にてあればにや、志賀の都のあれたるを見れば、其代の人のこゝちして、いともかなしきとなり。

あれやはあればにやを略きていへり。舊都を見て、當時の人の如く悲しきは、我はこゝの古人にやあらむと、をさをくうたがひてよめるなり。

さゝなみの國つみかみのうらさびてあれたる都見ればかなしも

一首の意　こゝの國の御神の御心の、すさびあらびて、遂に世の亂もおこり、御世もかはりて、かく舊き都となり、あれはてたる跡を見れば、いともかなしき事よとなり。

國つ御神は、この志賀に齋きまつれりし神をいふなるべし。うらさびはうらはゝにて心といふに同じ。さびはすさびあらぶる意なり。すなはち御心のあらび給ふよしにて祟り給へる事なり。

幸于紀伊國時川島皇子御作歌

しらなみの濱松が枝の手向ぐさいくよまでにか年の經ぬらむ

一首の意　白浪のうちよする濱の、松が枝の手向草は、いたくふりぬるを、今は幾代まで年の經たる事ならむとなり。

しらなみのは、白浪のよする濱とつゞく意なり。集中十八卷に、鶯の春になるらしとあるは、鶯のなく春になるらしの意、又十七卷に、露霜の秋にいたればとあるも、露霜のおく秋にいたればの意にて、皆同じ例なり。手向ぐさは種の意にて、手向とする具をいふ。濱松が枝やがて手向種なり。いにしへは、松ゞ枝をひきむすびて、ちぎりとし、手向ぐさもせしなり。

越勢能山時阿閉皇女御作歌

これやこの大和にしてはわがこふる紀路にありとふ名におふせの山

一首の意　この山や、大和にしてい、我見まほしく戀ひおもへる、かの紀路にありとかねてきゝ居る名高きせの山なるか、いとなつかしき山ゞとなり。

これやこのは、此はかのといふ意にて、かのとは、常に聞居る事、あるは世にいひ習へる事などをさしていひ、これやとは、今現に見る物をさしていふ。ずなはち此やかの、かねてきゝ居る云々ならんといふなり。さて阿閉皇女は、天智帝の皇女にして、日並知皇子の御妃、文武帝の御母ぎみ。こゝの夫といへるは、やがて日並知皇子をさし奉れるなり。

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌二首並短歌二首

持統天皇の吉野の離宮へ行幸し給ひしこと、たびゝなれば、いづれの時とも定め難し。

やすみしゝ　わが　大君の　きこしをす　天の　下に
國は　しも　さはにあれども　山　川　の　きよき河内と
みこゝろを　吉　野　の　國の　花ぢらふ　秋津の野べに
宮ばしら　ふとしきませば　もゝしきの　大　宮　人　は
船なめて　朝　川　わたり　船ぎほひ　夕　川わたる
この　川　の　絶ゆることなく　この　山　の　いや高しらし
いはばしる　瀧　の　みやこは　見れどあかぬかも

やすみしゝは大君の枕詞、きこしをすは、たゞをすともいふ、宣命に此乃食國（コノヲスクニ）とあり、きこしめすしろしめすなどいふに同じ、國はしものしもは、とりいでゝ重くいふに用ゐる詞にて、今しも、をりしも、などのしもに同じ、さはにあれどもは、わまたあれどもなり、山川のは山も川もなり、川を清音にいふべし、卷七に、皆人の戀ふるみよし野今日見ればうべも戀ひけり山川清み、とあり、河内は川のめぐれる中の地をいふ、河内とのゝはとゝのの意なり、みこゝろをは天皇の御心をよせて、よし野

にいひかけたり、古義に、天皇の御心よ、よしと稱へ奉れるよしにてつゞけたるならむか、さらばをはよといはむの如し、又例ののに通ふ言にて、うまさけを、をとめらをなどいふをにてもあるべしといへるは、吉野にのみつゞけたるにて、山川の清き河内と、とあるにかなはぬやうあり、吉野の國は吉野の郡なり、いにしへは一郡一郷をも國といへり、花ちらふは、卷十四に花ちらふこのむかつをのをなのをの、とあり、花散るをいふ、一說にちらふは、ちりあふにて、かたらふの類ひなりといへり、吉野は花の名所なれば、花ちらふ秋津とはいへるなり、秋津は吉野にあり、卷六に、み吉野の秋津の川の、とあり、宮ばしらふとしきませばは、宮にれはしませばといふ意にて、ふとしきはふとしりともいふ、たかしき、たかしり、に同じ、古事記に底津石根に宮柱ふとしり高天原に氷椽たかしり、次の歌に、高殿をたかしりまして、卷二に、宮柱ふとしきいましみあらかを、たかしりまして、とあり、ふとは、ふとみてぐら、ふとのりと、などのふとの如く敬語にうへたるにて、たかしき、たかしり、のたかに同じ、されば卷二に、すめろぎのしきます國、とありて、たゞしきともいへり、さてのふとにつゞけむとてはしらといひ、秋津の野べに宮柱ふとしきませば、といひて、秋津野に宮をたてまつりませばと聞かせたるなり、講註におはします意

とばかりいへるは、秋津の野べに、といふよりつゞけて見ざればなるべし、もゝしきのは、大宮の枕詞、船なめて、い船をならべてにて、馬なめて、稽なめて、などの類なり、朝川わたりは、朝に川を渡るをいひ、夕かた渡るを夕川わたるといふ、十六夜日記に、廿七日あけはなれて後、ふじ川渡る、朝川いと寒しとあるも同じ、船ぎはひは我先にと競ひて船を漕ぐをいふ、卷二十に、ふなぎはふ堀江の川、とあり、この川のものは、の如くといふ意なり、この山のも同じ、いはばしるは瀧の枕詞なり、珠水激とあるを、古義に、いはばしるとよみたれども、珠水と書きたることおぼつかなし、按ふに珠は隕字の誤寫なるべし、おちたぎつとよむべしとて、しか改めたれど、冠辭考に、瀧は石の上を玉水の激るものなれば、意を得て珠水激と書きつと見ゆれば、此三字もいはばしるとよむべきなり、とあるに從ふべし、瀧のみやこは宮の近くに瀧あればなり、略解に今吉野の夏箕河の下に宮の瀧村といふあり、此宮の跡なるべしといへり、みやこい宮處にてこは、てゝかしこ、のこの如く處の義なり、一首の意は、わが大君のしろしめす國は多かれども、山も川も清き處とて、此吉野のさとの秋津野に大宮をたてゝおいしませば、宮仕する人たちはうちよろこびて朝夕きろひて此川を渡れり、されば、このみやこは、此川の如く絶ゆることなく、又

此山の高きが如くさかゆるなちひ、見れども〳〵あかぬなぎめかなとなり、

反歌　[illegible]

見れども〳〵あかぬ吉野の川の常滑の絶ゆることとなく又かへり見む

見れども〳〵あかぬ吉野の川の底にある常滑の如く絶えずこゝに來て、そのよきけしきを見むとなり、長歌にはもはら天皇の御うへをよみ、此反歌はみづからのうへをよめり、卷六に「みよし野の秋津の川の萬代に絶ゆることなく又かへり見む」いはばしりたぎち流るゝはつせ川絶ゆることなく又も來て見む」などあるも似たるさまなり、常滑は、とこしへになめらかなる義にて、水底の石などにつきたるものをいふ、卷九に「入出見河の常滑にみゆき殘れり」卷十一に「とよはつせぢは常滑のかしこき道を」とあり、古事記傳にとことはなることと通ひて底滑の義なりとあれど、底滑といへる例なきやうなり、

やすみしゝわが大君神ながら神さびせすと吉野川たぎつ河内に高殿をたかしりまして

のぼりたち國見をすれば たゝなはる青垣山

やまつみの まつる御調と春べは花かざし持ち

秋たては紅葉あざせりゆふ川の神も

大御饌に仕へまつると上つ瀬に鵜川をたて

下つ瀬に さでさしわたし山川もよりて仕ふる

神の御代かも

神ながらは孝德紀に惟神我子應治故寄、宣命に隨神所思行佐久とあり、神にておはしますまゝにといふ意なり、神にておはしますとは卷二に「大君は神にしませば」宣命に現御神止大八島國所知天皇大命とあり、神さびせすとは神さび爲給ふとてにて、天皇は神にしませば世を離れて神のやうにわたらせ給ふとて、此吉野に宮をたてゝおはしますとなり、神さびは人の境を離れて神のやうなるをいふ、天に「やすみしゝわが大君高ひかる日のみこ神ながら神さびせすと」榮花物語に「陰陽師どもは晴明みつよしなどいふ神さびたりしものどもにて」とあり、又神々しくたふとき意にて、山などにもいへり、次に「よろしなべ神さびたてり」卷三に「さゝしごとまことたふとくくすしくも神さびをるかそれの水島」「いつのさも神さびけるかかゞ山の鉾杉がもとに苔むすまでに」天地の分れし時ゆ神さびて高くたふとき」遠き代に神さびゆかむいでましところ」とあり「神び」「神しみ」ともいへり、卷

十七に「今日見れば木だちしげしもいくよ神び」卷六に「もゝ代まで神しみゆかむ大宮所」とあり、萬葉考にさびは必ずさみ手すさみあそのすさみに同じく、なぐさみといはむの如しといへるはたがへり、國見を爲給へば云々と、國をしろしめすさまのみにて、すこしもなぐさみの意見えぬやうなり、さびは、しかぶりの意にて、次に「山さび」卷二に「うま人さびて」卷五に「をとこさび」「をとめさび」伊勢物語に「翁さび」とあり、山さびは山らしく、うま人さびは貴人らしく貴人ぶりなどの意なり、古事記に勝さびとあるも、かちはてりたるさまを爲給ふあり、又「うらさび」「さびけ」などの如く、さびしき意にもいへり、せすは爲の敬語にて、爲給ふといふに同じ、せすとのとはとての意なり、たぎつは、たぎるに同じ、川の瀬に水のたぎり流るゝをいふ、卷六に「いはばしるたぎち流るゝはつせ川」卷九に「川の瀬にたぎつを見れば玉もかもちり亂れたる此川とかも」とあり、高殿は日本紀竟宴歌に「高殿にのぼりて見れば天の下四方にけぶりて今ぞ富みぬる」仁德紀に七年天皇居高臺而遠望之とあり、たかしりましては、ぶとしりましてに同じ、前にいへり、國見をすればは人麿朝臣の國見をするやうにきこゆれど、こゝは天皇の國見を爲給へばなり、敬語にいふべきなれど、歌は音の數に限あれば、かくいへるなるべし、國見平爲波とあ

るを、古義に國見勢爲波のうつし誤なりといへど、確證なきは從ひ難し、たゝあはるゝ、たゝなづくともいひて青垣山の枕詞なり、物のたゝまれたるが如く、山のいくへもかさなれる義なり、卷六に「やすみししわが大君のたかしらす吉野の宮は たゝなづく青垣こもり」卷十二に「たゝなづく青垣山のへだゝればしば〳〵君をことはぬかも」古事記に「たゝなづく青垣山こもれるやまとしうるはし」とあり、青垣山は垣のやうにめぐれる山の義にて、山の名にはあらず、青は樹木茂りて青きをいふ、青垣山の下にの字を添へて聞くべし、拾穗本には「青垣山の」とあり、玉の小琴に青垣山はといふ意にて、花かざし持ちとつゞくなりといへど、此青垣山は次の「ゆふ川」にむかへいへるにて、ゆふ川の神もとあるからは、青垣山の山つみとあるべきなり、又「上つ瀨に鵜川をたて」は、ゆふ川の神とつゞくが如く「花かざし持ち」も、山つみにつゞくなり、やまつみは山の神をいふ、略解に、山つもちの意なりとあれど、山つ神の略なるべし、神代紀に山神等號山祇とあり、まつるは、たつるともいふ、卷二十に「ぬさまつり」卷十八に「世の人のたつることとて」とあり、略解に、たてまつるを略きていふとあるはたがへり、たてまつるいたてとまつるとかさなれるなり、御調は人民より奉る土地の產物をいふ、卷十八に「みつぎたから」卷二十に

「みつぎ船」とあり、御調とのことはとての意なり、春べはは春のころはといふ意なり、古今集春上に「梅の花匂ふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける」とあり、古義には「春べには」と書けり、さて略解に春べのべは方の意あり、古事記に御枕方御足方とあり、山べ川べゆくへあど、すべて方の意にてあきらけしとあるは、なはあかぬこゝちす、山べ川べなどのべは邊の意にて、卷三に「おきつなみへなみたつともわがせこが御船のとまり泯たゝめやも」とあるへは海濱の意なり、こゝの春べ、また古今集夏に「むかしべや今もこひしき時鳥故郷にしも鳴きてきつらむ」とあるむかしべまたゆふべなどの時をいふ詞につくべはころの意なり、花かざし持ちは山に花の咲けるを、山神のかざせるやうにいへるあり、かざしは髮さしの略にて、かんざしともいへり、紅葉かざせりは一本にもみぢ葉かざしとあり、古義にはこれを用ひたり、ゆふ川は青垣山にむかへいへるにて、吉野川の白くたぎち流るゝさまのしらゆふに似たるをいふなるべし、略解に、ゆふ川は宮の瀧の末に今ゆ川てふ處ありとゞ、これか、又は七の卷に「ゆふや河内」とよめる、これならむ、考ふべしといへり、神もは青垣山やまつみとあれば、こゝも「ゆふ川の川の神も」とあるべきにや、大御饌にはは御膳にといふに同じ、鵜川は鵜をつかひて鮎などを

とるをいふ、さでは和名抄に纏佐天網如箕形狹後廣前也とあり、古義には「さでさしわたす」とよみ、もみぢ葉かざしさでさしわたすとゝぢめり、語勢味ふべしといへり、一首の意は、わゞ大君は神にておはしますまゝに、神のやうにわたらせ給ふとて、此吉野に高殿をたてゝ國見を爲給へば、山の神は御調を奉らむとて、春い花、秋は紅葉を奉り、川の神も御膳の料にとて、上つ瀨には鵜を放ち、下つ瀨にはさでさしわたして、魚をとりて奉れり、かく臣民のみならず、山川の神までも仕へ奉るとは、まことにめでたき御代なりとあり、上の長歌には臣民の仕へまつることをいひ、此長歌には山川の神までも仕へまつることをよめり、

反歌

山川もよりて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも

山川も仕へまつる神にてましますわが大君の、たぎつ河内に船出せさせ給ふよまことにたふときことかなと、天皇の船出爲給ふを見奉りてよめるなり、

幸于伊勢國時、留京柿本朝臣人麿作歌

持統紀六年三月に、此伊勢の行幸ありて、志摩をもすぎ給ふこと見えたり、其時人麿は京にとゝまりて、此歌をよめるあり、

あでの浦に船のりすらむをとめらが玉裳の裾に汐みつらむ

あでの浦は志摩英虞郡にあり、名所今歌集に、加藤枝直「あでの海のあまのつり舟にはをよみいらごが崎へこぎわたる見ゆ」本居大平「浪さわぐ伊勢島遠く見わたせばたづもむれたつあでの松原」をとめらは從駕の官女をいふ、玉裳の裾は卷二十に「玉裳裾ひく」とあり、裳裾といふに同じ、玉は、玉だすき、玉くしげなどの玉と同じく、美なる意あり、裳は袴やうのものにて、もはまくの意かといへり、汐みつらむかい汐がうちよせて裾をぬらすならむとなり、一首の意は、宮女等は宮中にのみ仕ふる身なれば、めづらしくおもひてあでの浦に裳裾をぬらして船のりするならむとなり、裳裾をぬらすは、めづらしきまゝに知らず〳〵裳裾をぬらすなり、

くしろつくたぶしの崎に今もかも大宮人の玉藻かるらむ

くしろつくは、たぶしの枕詞、たぶしは手の節にて臂をいふ、臂に付るくしろの意にてつゞけたり、くしろは臂にまく飾物なり、卷九に「わぎもこはくしろにあらなむ左手のわがおくのてにまきていなましを」古事記に女島王所纒御手玉釧とあり、たぶしの崎は志摩答志郡にあり、名所今歌集に、加藤千蔭「伊勢島や汐干のなごり見わたせばたぶしの崎に玉藻かるなり」今もかもは今日もかもといふ類にて、

今かといふに同じ、古今集春下に「今もかもさき匂ふらむ橘の小島の崎の山吹の花」とあり、一首の意おきちけし、

しほさゐにいらごの島べ漕ぐ船に妹乘るらむあらき島わを

しほさゐは、萬葉考に潮のさわぎにて、わきの約ゐなりといへり、卷三に「しほさゐの波をかしこみ」とあり、いらごの島は前にいへり、あらきは浪あらきをいふ、島わのわは、浦わ、磯わ、道のくまわ、湊わ、里わ、などのわに同じ、たわみめぐれるをいふ、一首の意は、いらごの島べは浪あらき所と聞つるに、潮の滿ち來るをりに船出してさゞ妹のわび居るならむとなり、

當麻眞人麿妻作歌

吾せこは何處ゆくらむ沖つ藻のなばりの山を今日か越ゆらむ

沖つ藻のは、なばりの枕詞、なばりの山は、伊賀名張郡にあり、名所今歌集に本居宣長「旅人の衣匂はせおきつものなばりの野べの秋萩の花」とあり、なばりは隱の義なれば、沖つ藻のなばりとつゞけたり、一首の意おきちけし、

石上大臣從駕作歌

わぎもこをいさみの山を高みかも大和の見えぬ國とほみかも

わぎもこは、わが妹子の約にて妻をいふ、仁德紀に「はしたてのさかしき山もわぎもこと二人こゆればやすむしろかも」とあり、いさみの山は式に伊勢國伊佐和神社、志摩國伊佐波神社などいふあり、此國々の中にいさみの山といふもあるか、又なら山を、ふる衣きおらの山といひ下せし類にて、佐美の山などいふに、いさみといひかけしか、大和なる妻のあたりの見ゆるやとて、見やれども見えぬは、其山の高くて隔てたるにや、國の遠ければにやといへるありと萬葉考にいへり、

輕皇子宿于安騎時、柿本朝臣人麿作歌

輕皇子は文武天皇のまだ皇子にておはします時の御名なり、天武天皇の御嫡孫にて、皇太子草壁皇子の御子なり、日本紀などには珂瑠と書けり、安騎野は大和宇陀郡にあり、名所今歌集に、本居宣長「御狩たつあきの大野のはたすゝきしぬぶにたへぬ戀もするかも」とあり、

やすみしゝ　わが大君　たゝてらす　日の御子
神ながら　神さびせすと　ふとしきす　みやこをおきて
こもりくの　はつせの山は　まきたつ　あら山道を
いはがねの　おもとをしなべ　さゝとりの　朝こえまして

かぎろひの　夕さりくれば　み雪ふる　あきの大野に
はたすすき　しのをれしなべ　草まくら　旅やどりせす
いにしへおもひて

わが大君は輕皇子を申す、眞木たつ、眞木は檜の木をいふ、檜の木の生ひ立てるなり、しもとおしなべ、しもとは卷十四に「おふしもとこのもと山の」雄略紀に其聚脚如弱木林、延喜式に楛、和名抄に蓬之毛止木、細枝也、枕草子に「もゝの木若だちて、いとしもとがちにさし出でたる」とあり、木の若き枝をいふ、稚木は本に枝繁き故に繁本の義なりなどいふは、なづめる說になむ、これをあつめて葛にて結へば、しもとゆふ葛城山」などゝ葛の枕詞にいへり、又「しもとにて打つ」などいふは、若き枝は鞭のやうにて打つによき物なれば、刑具として用ふるなり、おしなべは、おし靡かしてといふ意、しもとおしなべは御行列のさまをいへり、さかとりのは朝越の枕詞、かぎろひのは夕の枕詞、はたすゝきは薄の穗の如く靡くをいふ、神功紀に「はたすゝき穗に出づる吾や」とあり、しのをおしなべ、しのはしぬと、もいふ、神代紀に篠小竹也、此云斯奴とあり、旅やどりせすは旅やどり爲給ふなり、いにしへおもひては御父君の行啓ありしうのかみの御事をおぼし給ひてなり、一首の意は輕皇

子の都をすて、泊瀬の荒山道を越え、寒き安騎野に旅やどり爲給ふは、御父君を慕ひ給ふが故なりとなり、

短歌

あきの野に宿る旅人打靡きいもぬらめやもいにしへおもふに

宿る旅人は從駕の人々をいふ、古義には「やどれるたびと」とよめり、打靡きは、うち臥してといふに同じ、いもぬらめやもは、よく寢られめや、よく寢られざるべしといふ意、一首の意は此野に宿る旅人は懷古の情に堪へずして、よく寢られざるべしとなり、

眞草苅る荒野にはあれどもみぢ葉のすぎにし君が形見とぞ來し

眞草は、薄をいふ、楢の木を眞木といふ類なり、もみぢ葉のは、すぎにしの枕詞、一首の意は眞草苅る荒野なれども、御父君の御獵したまひし御跡なれば、御形見として來給へりとなり、卷十五に「塩氣たつ荒磯にはあれどゆく水のすぎにし妹が形見とぞ來し」とあるも同じ意なり、

東の野にかぎろひのたつ見えてかへり見すれば月傾きぬ

かぎろひは、朝夕の陽炎をいふ、こゝはあけそむる光をいへり、曉東天の白みたるを見て、西の方をかへり見れば、月はすでに傾きたりとなり、

日並知の皇子のみことの馬なめて御獵たゝしゝ時は來むかふ

日並知の皇子は草壁皇子の御諡なり、皇子のみことは尊稱なり、來むかふは其時刻が今來れりとなり、卷十九に「春すぎて夏來むかへば」とあり、一首の意あきらけし、

○藤原宮之役民作歌

藤原宮は持統天皇の御宮なり、大和十市郡にあり、持統天皇四年此地を相して宮殿を造らしめ、八年十二月淸御原宮より、こゝに遷り給ひき、其間工役に從へる民のよめる歌なり、

やすみしゝ　わがおほきみ　たかひかる　日の　みこ
あらたへの　藤原がうへに　をす國を　めしたまはむと
みあらかは　たゑしらさむと　神ながら　おもほすなべに
天地　も　よりてあれこそ　いはばしる　あふみの國の
ところもでの　たなゝみ山の　まきさく　檜のつまでを
ものゝふの　八十うぢ川に　たまもなす　うかべながせれ

そをとると　さわぐみ民も　家わすれ　身もたなしらに
鳴じもの　水にうきゐて　わが作る　日のみかどに
知らぬ國より　巨勢路より　わが國は　常世にならむ
ふみおへる　あやしき龜も　あらた代と　いづみの川に
もちこせる　眞木のつまでを　もゝたらず　いあだにつくり
のぼすらむ　いそはく見れば　神ながらならし

あらたへのは藤の枕詞、藤原ぞうへには古義に上い山上野上また高圓の上高野原が上なぞいへる上に同じ、こは上下をいふ上にはあらず、邊といふ意に近し、されば唯藤原の地のあたりと心得てあるべしといへり、をす國をは天の下をといふに同じ、天の下は天皇のきこしをす國なればなり、めしたまはむとは見給はむとてといふ意、めしは見の敬語にて、知を知ろし聞をきこしといふ類あり、みあらかは天皇の御在所、即宮をいふ、卷二に「みあらかをたかしりまして」とあり、古義には大宮はとよめり、おもほすなべには、おぼしめすにつれてといふ意、なべには、つれてといふほどの意なり、卷七に「かりがねをきゝつるなべに高圓の野のへの草ぞ色づきにけり」かりがねの來鳴きしなべに唐衣立田の山はもみぢうめたる」

古今集秋上に「日ぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬとおもふは山のかげにぞありける」我門にいなおほせ鳥の鳴くなべに今朝吹く風に雁い來にけり」とあり、天地もよりてあれころは上に「山川もよりて仕ふる」とある類にて、天地もは天神地祇もといふ意、よりてあれころは天神地祇も依り給ひてあればこそかくあるなれといふ意なり、かくあるなれとは、宇治川によく流れ着くをいふ、いはばしるは、あふみの枕詞、ころもでのは、たなかみ山の枕詞、たなかみ山は近江栗本郡にあり、名所今歌集に契沖「衣手の田上河の網代守みをうち人にいづれ寒けき」千隆「あじろ人衣手寒し川上の田上山にあらしふくころ」とあり、まきさくは檜の枕詞、檜のつまでは檜の木の荒造のまゝなるをいふ、つまでは杣人の荒作りせし木をいふ、ものゝふのゝ八十の枕詞、うぢ川は山城宇治郡なる宇治川にて、八十を加へたるは、枕詞よりつゞけむが爲にて、振山を袖振山といふ類なり、たまもなすは浮の枕詞、うかべながせれは、檜の木を伐りて浮べ流せればといふ意、そをとるとさわぐみ民もは流れ來る木をとりて藤原へ送るをいふ、み民は、たゞ民に同じ、身もたなしらには我身を忘れて仕へまつるをいふ、たなは「たなぐもり」「たなぎらひ」などのたなに同じ、しらには卷十五に「さよふけてゆくへをしらに」崇神紀に「すらくを

しらに」とあり、知らずといはむが如し、伊勢物語三十四段に「いへばえに」とあるえにも、得ずてふ意なり、鴨じものは鳥じもの馬じもの雪じものゝ類にて、浮居ての枕詞なり、水にうき居ては何を隔てゝ「いづみの川に」につゞけて聞くべし、わが作るは吾等が造營するなり、日のみかどは藤原宮をいふ、卷五に「高光日の御朝庭」とあり、知らぬ國よりは知らぬ國々よりも巨勢路を經て材木を奉るとなり、古義に名も知らぬ外國より德化を慕ひて依り來るといふ意につゞけたり、こは皇居をことほぐ歌なれば、ことに外國の歸依義を帶びて枕詞とせるなり、考に御國の內なる諸國のことゝせるはひがことなり、御國の內なるを、いかで知らぬ國とはいはむ、うのうへ次に我國はとあるにも對ひたる詞なれば、いよ〳〵外國をいふなることは、しるきをや、崇神紀に是歲異俗多歸國內安寧とあるを併せ考ふべしといへれど、たゞ知らぬ國とあるを、外國の義といふことといかゞなり、御國の內なるも東國はえみじとさへいへり、たゞおほらかに知らぬ國と心得べし、又古義には知らぬ國を枕詞とし、よりを巨勢の上におきて「より巨勢路より」とよみ、知らぬ外國の皇化にまつろひて歸來よしもて巨勢路へいひかけたり、といへり、此說いとおぼつかなきこゝちす、外國のよりくる義ならば、「知らぬ國」と「より」との間に「も」が

の」などのてにをはあるべきなり、このてにをはなくては、しか聞え難し、巨勢は大和高市郡なり、下に「巨勢山のつら〳〵椿」とよめり、常世にならむは、我國は永久不變の常世となるならむ、そはふみおへるあやしき龜出でたればなりとなり、ふみおへるあやしき龜は夏の禹王の時、神龜負圖出洛水てふ事にて、我國にも天智天皇九年六月神龜出でし事書紀に見えたり、あらた代は新都にてしろしめす御代をいふ、あらた代とて出づてふ意にて、泉川にいひかけたり、泉の川は山城相樂郡にあり、名所今歌集に東磨「ひかれては世にもいづみの柚水すらくちはてぬまで」たのみなりける」もちこせるい宇治川より陸路を泉川に持越して、さて又流すなり、もゝたらずは五十の枕詞、いろはく見ればは人民のいそしみ勤むるを見ればなり、一首の意は我天皇は大和の藤原に新都をつくり、天下をしろしめしたまはむとて、其宮殿の材木を近江の國の田上山より伐り出して、山城の宇治川に下し、こゝより陸路を泉川に持越して筏に造りて、川をのぼせて、藤原に運ぶなり、かく人民の家をも身をもうち忘れて、いろしみ勤むるは、我天皇の神にてましますが故なるべしとなり、

從明日香宮遷居藤原宮之後、志貴皇子御作歌

志貴皇子は天智天皇の御子、光仁天皇の御父なり、

たわやめの袖ふき返すあすかの風都を遠みいたづらに吹く

たわやめは、たをやめに同じ、こゝは官女などをいふ、あすか風は飛鳥にて吹く風なり、伊香保風佐保風などいふ類なり、歌の意は、官女等の袖ふきかへしたる風も、今は宮處の他に遷りて遠くなりたれば、ふきかへすべき官女の袖なく、いたづらに吹きわたると、飛鳥の盛衰を風によせてよみ給へるなり、

藤原宮御井歌

藤原宮なる供御の料の井をよめる歌なり、いにしへは泉流をも井といへり、萬葉考に、上つ代より異なる清水ありて、處の名ともなりしものゝ、香山の西北の方に今清水あゞといふは、これにやといへり、

やすみしゝわ　で　大君　たかひかる　日の　皇子
あらたへの　藤井が原に　大御　門　はじめたまひて
はにやすの　堤のうへに　ありたゝし　めしたまへば
やまとの　青香具山は　日のたての　大御　門に
春　山　と　しみさびたてり　うねびの　このみづ山は

日のよこの　大御門に　みづ山と　山さびいます
みゝなしの　青菅山は　そともの　大御門に
よろしなべ　神さびたてり　名ぐはし　吉野の山は
かげともの　大御門ゆ　雲ゐにぞ　遠くありける
高しるや　天のみかげ　天しるや　日のみかげの
水こそは　ときはにあらめ　御井の眞清水

わご大君のわごはわがに同じ、かの音下のおの音の爲にごとなれるなり、大御門御門といふに宮殿はこもれり、はじめたまひては造營をはじめ給ひてなり、はにやすの堤は埴安の池の堤なり、ありたゝしは立ち給ひてといふに同じ、ありは卷四に「ありさりて今ならすとも」とあるが如く、添詞、たゝしは見をめしといふ類にて敬語なり、めしたまへばは見給へばといふに同じ、前にいへり、青香具山の青は樹木茂りて青きをいふ、日のたては成務紀に以東西爲日縱とあり、方向をいふ詞なり、春山は、本居氏、春山とあるは、青山の誤なるべし、此歌すべての詞どもをおもふに、わけて春といはむことといかゞ、うのうへうねびのこのみづ山はみづ山と、いへるに對ひても、青香具山は青山と、とあるべきなりといはれたるは、いとこと

わりあるやうにおぼゆ、うねびは畝火山にて大和高市郡にあり、玄みさびたてりは、たふとげに茂りて立てりとなり、玄みは繁茂の意、さびは神さびのさびに同じく、たふとき意なり、萬葉考に神さびの略とあるはわろし、このみづ山のみづは卷六に「みづ枝さし」卷十九に「昔よりなかりしみづも」などあるみづと同じく、みづ〳〵しくうるはしき意なり、日のよこは成務紀に南北爲日横とあり、方向をいふ詞なり、萬葉考に日のよこは南北にて、南を先とする時は、畝火は南の御門に當れりとあれど、次に吉野の山はうげともの大御門ゆとあれば、南といふことといかゞなり、又古義に香山は東の御門に向ひ、畝火山は西の御門に向ひ、吉野山は南の御門に向ひ、耳梨山は北の御門に向ひ立ちたれば、香山を日のたてといひ、吉野山をかげともといひ、耳梨山をそともといへるは、いづれも正しく當れる事なるを、畝火山も西の御門に向ひたれば、實はこれも日のたてといはむず正しく當れる事なる、玄かれども此歌日のたて、日のよこ、かげとも、うともの四をいひて玄たてたるにひとり日のよこをいひ洩すべきにあらざれば、日のよこの言を、西の御門にやとひたるものなり、かくては事の實にたゞひたるごとなれど、歌は詞を主とするものなれば、あなゞちに拘るべきにはあらず、玄かるをこの理を知らで疑ふは、なか〳〵にいにしへの歌詞の、理にのみ泥まざりし事を知らざるが故なりとあれど、

歌はおほらかにこそいへ、黒を白とはいはず、南を西とはいはざるやうなり、猶可考、山さびいますは、たふとき山としてありとなり、みゝなしは耳梨山にて大和十市郡にあり、青菅山は山の名にあらず、青い青香具山の青におなじく、菅は本居氏菅は借字にて、すが〳〵しき意なるべしといはれたれど、「すが〳〵し」「すが〳〵」とこそはいへ、すが何といへる例なきやうなり、また略解に常に常磐なる山菅の茂れる山といふことなり、山菅とは麥門冬をいふとあれど、こゝは菅山とあれば、山菅にはあらざるべく、今考ふるに、こは菅原の菅と同じく、菅の生ひ茂れるをいふなるべし、うともは北をいふ、成務紀に山陰曰背面とあり、よろしなべは、よろしく並びてといふ意なり、卷三に「よろしなべわがせの君がおひ來にし此春の山を妹とはよばじ」とあり、名ぐはしは名高しといふに同じ、くはしは、はむる詞なり、古事記上に「くはしめ」應神紀に「香くはし花たちばな」允恭紀に「花くはし」とあり、かげともは南をいふ、成務紀に山陽曰影面とあり、雲ゐにぞ云々は遠く雲ゐに見ゆと、なり、高しるやは天の枕詞、天しるやは日の枕詞「雲ゐにぞ遠く」といふをうけて、高しるや云々といひ出でたるなり、天のみかげ日のみかげは、略解に天の影日の影

のうつる清水といへるなり、影といひて、やがてうつる意いこもれり、大神宮儀式帳に大神の御蔭川の神といふあり、これ日の御影うつる川といふ意なりといへり、一首の意は、藤原に大宮をたて給ひて、こゝにましますほとに、埴安の池の堤に立ち給ひて、四方をながめ給へば、香具山畝火山耳梨山など、めぐりにたち並びて、樹木青々と茂りて、いとたふとげなるに、名高き吉野山も遠く南の方に見えて、まことによき處なり、されば、こゝにわき出でゝ、そらのかげ日の影さへうつる此清水は、永久に清冷なるべしとなり、山々の神さびたてるさまをいひて、清水の清冷なるを知らせ、そらの影日の影のうつるといひて、水のすめるさまを知らせたり、

短歌

藤原の大宮づかへあれつがむをとめがともはともしきろかも

あれつがむは生繼むにて、いつまでも繼續したしと願ふ意なり、をとめのともはをとめは官女をいふ、ともは輩といふに同じ、ともしきろかもは、うらやましきかなといふ意なり、下にあさもよし紀人ともしも卷二にあやにともしきとあり、一首の意は、此大宮へ仕へ奉りたき事なれども、工役に從事する身にては、とても其事かなはず、さるにても常に供奉する官女たちこそ、うらやましけれ、我も女の身

ならば、かく仕へ奉るべきにとなり、天皇は女帝にましませば、供奉の人々い、多くい女官なれば、かくいへり、長歌には御井の事をいひ、こゝには官女の上をいひて藤原の大宮をことほぎまつりしなり、

右歌作者未詳

これは後人の註なり、右長短歌の作者詳ならずとなり、

大寶元年辛丑秋九月、太上天皇幸于紀伊國時歌

太上天皇は持統天皇を申す、文武天皇御即位の後、此尊號を奉り給へり、歌の字の上に供奉之人々作の六字を入れて見るべし、

巨勢山のつらつらに椿つらつらに見つゝおもはな巨勢の春野を

巨勢山は大和高市郡にあり、前にいへり、つらつら椿は枝の多く生ひ連れる椿なりといふ、見つゝおもはなは椿をよくよく見るにつけて、其花咲く春のさまを懸ひ思ふとなり、なはかなのなに同じく感詞なり、一首の意あきらけし、

右一首坂門人足

あさもよし紀人ともしも眞土山ゆきくと見らむ紀人ともしも

あさもよしは、紀の枕詞、眞土山は、下に紀路に入りたつまつち山とよみて、大和に

近き山にて紀伊伊都郡にあり、ゆきくは、ゆきゝといふに同じ、一首の意は、まつち山のよきけしきを、紀伊の人は常に往來に見る事ならむが、我は行幸の供奉なれば、長く見る事もかなはず、さて〳〵紀伊の人は、うらやましき事よとなり、

右一首調首淡海

二年壬寅、太上天皇幸于三河國時歌

二年は大寶二年なり、持統天皇此年十月行幸、十一月還御の事、國史に見ゆ、

引馬野にほふ萩原入り亂りてころもにほはせ旅のしるしに

引馬野は遠江敷智郡なり、ころもにはは衣に萩の花の色をすりつくるをいふ、旅のしるしにとは旅には摺衣を着る事、いにしへのならひなれば、旅立したるしるしに、衣を摺れとなり、一首の意は、引馬野に咲き匂ふ萩原にわけ入りて、旅立したるしるしに、萩の花の色を衣に摺りつけよとなり、

右一首、長忌寸奥麿

いづてにか船はてすらむあれの崎こぎたみゆきし棚なし小舟

いづて、略解に何所はいづくとよむべし、いづことよふは後なりとあれど、こは處の義にてくはこのうつれるなれば、いづことろよむべけれ、船はては船のゆきつきて泊るをいふ、あれの崎は略解に和名抄に美濃國不破郡荒崎見ゆ、此幸に美濃を經給ふよし紀に見ゆれば、これか、されど三河ならむか、なほ尋ぬべしといへり、こぎたみは漕ぎめぐるなり、棚なし小舟は、大船には棚あれども、小舟には棚なければいふ、一首の意あきらかなり、

右一首、高市連黑人

譽謝女王作歌

ながらふる褄吹く風の寒き夜にわがせの君はひとりかぬらむ

ながらふるは衣のつまの長きをいふ、ひとりかぬらむは獨寢るならむとなり、一首の意かくれたるふしなし、寒夜夫のうへをおもひやりてよめるさまなり、

長皇子御歌

天武天皇の御子なり、此御歌は京にてよみ給へるなり、

宵にあひて朝おもなみかたりにかけながき妹が廬せりけむ

宵にあひて朝おもなみかたりにかけながき妹が廬せりけむ、新枕せしあした、女の羞ぢて顏を隱すをいふ、おばりの添詞としたり、おもなみは面目なきをいふ、伊勢物語三十四段におもなくていへるなるべしとあり、なばりにかは伊賀の名張にてかといふ意、けながきは久し

近き山にて紀伊伊都郡にあり、ゆきくは、ゆきゝといふに同じ、一首の意は、まつち山のよきけしきを、紀伊の人は常に往來に見る事ならむが、我は行幸の供奉なれば、長く見る事もかなはず、さて〳〵紀伊の人は、うらやましき事よとなり、

右一首調首淡海

二年壬寅、太上天皇幸于三河國時歌

二年は大寶二年なり、持統天皇此年十月行幸、十一月還御の事、國史に見ゆ、

引馬野にほふ萩原入り亂りてころもにほはせ旅のしるしに

引馬野は遠江敷智郡なり、ころもにはは衣に萩の花の色をすりつくるをいふ、旅のしるしにとは旅には摺衣を着る事、いにしへのならひなれば、旅立したるしるしに、衣を摺れとなり、一首の意は、引馬野に咲き匂ふ萩原にわけ入りて、旅立したるしるしに、萩の花の色を衣に摺りつけよとなり、

右一首、長忌寸奥麿

いづこにか船はてすらむあれの崎こぎたみゆきし棚なし小舟

いづこ、略解に何所はいづくとよむべし、いづことといふは後なりとあれど、こは處の義にてくはこのうつれるなれば、いづことところよむべけれ、船はては船のゆきつきて泊るをいふ、あれの崎い略解に和名抄に美濃國不破郡荒崎見ゆ、此幸に美濃を經給ふよし紀に見ゆれば、これか、されど三河ならむか、なほ尋ぬべしといへり、こぎたみは漕ぎめぐるなり、棚なし小舟は、大船には棚あれども、小舟には棚なければいふ、一首の意あきらかなり、

右一首、高市連黑人

譽謝女王作歌

ながらふる褄吹く風の寒き夜にわがせの君はひとりかぬらむ

ながらふるは衣のつまの長きをいふ、ひとりかぬらむは獨寢るならむとなり、一首の意かくれたるふしなし、寒夜夫のうへをおもひやりてよめるさまなり、

長皇子御歌

天武天皇の御子なり、此御歌は京にてよみ給へるなり、

宵にあひて朝おもなみなばりにか、けながき妹が廬せりけむ

宵にあひて朝おもなみとい、新枕せしあした、女の羞ぢて顏を隱すをいふ、おばりの添詞としたり、おもなみは面目なきをいふ、伊勢物語三十四段に「おもなくていへるなるべし」とあり、なばりにかは伊賀の名張にてかといふ意、けながきは久し

く逢はざる意、虚せりけむは假屋に旅寝せしならむといふ意、卷三に「雷の上にいはりせるかも」とあり、これも一首の意かくれたるふしなし、

舍人娘子從駕作歌

丈夫がさつ矢たばさみたち向ひ射る的形は見るにさやけし

さつ矢は獵に用ふる矢なり、彦火々出見尊、山の幸おはして、弓矢もて鳥獸を獲給ひしよりいふ、さつ弓、さつをなどいふも、しかなり、的形は伊勢多氣郡なり、一首の意は的形の浦のけしきのよきをよめるにて、的形といふにつけて、ますらをがさつ矢云々といひかけたるなり、

三野連岡麿入唐時、春日藏首老作歌

古本の傍注に大寶元年正月、遣唐使民部卿粟田眞人朝臣以下六十人乘船五隻、小商監從七位下、中宮少進美奴連岡麻呂云々とあり、考ふるに續日本紀の今本、今度の遣唐使に粟田朝臣其他の人はありて、美奴連岡麻呂は見えねど、今本はすべて落ちたる文多ければ、いふに足らず、右の注は紀の全き本して記しつと見ゆれば、よりぬ、今本に名闕と注せしは、いと後人のわざなり、岡麿呂は靈龜二年正月正六位上より從五位下になりし事も紀に見ゆと萬葉考にいへり、

大船の對馬のわたり渡中に幣とりむけてはや歸り來ね

大船の、萬葉考にこを今本に在根良と書きて、ありねよしとよみしは、必ずあるまじき事なれば、二くさの考をしつ、其一に百船のとするは卷十一に毛母布爾乃波都流對馬とよみ、卷十五に百船之泊停跡などあればなり、其字も例の草の手より は、相まがふべきなり、今一は百都舟を誤りしにや、これもつとつゞくるは右に同じ、されどなほ上によるべしといへり、今考ふるに、卷二に大船乃津守之占とあるこれにて、在根良は大布根之の誤なるべし、渡中に海中なり、一首の意は遠き外國に渡る旅なれば、對馬の海中にて、海神に幣奉り、平安を祈りて、早く歸り來ませとなり、

山上臣憶良在大唐時、憶本卿作歌

山上憶良も前と同時に少錄の職にて入唐せり、

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ

早く日本へ歸らむといふを略けるなり、卷十四に「いざ子ども日本へ早く白菅の眞野のはぎ原手折りてゆかむ」とあり、大伴のは、御津の濱の枕詞、御津は攝津西成郡なり、契沖、まつの時みつの濱風いとはやもなにはをすぎて冬は來にけり」と

よめり、松は家人の待つ意をかねたり、一首の意は故郷なる子どもの、さぞ待ちわびてあるべければ、早く歸らむとなり、

慶雲三年丙午、幸于難波宮時歌

續日本紀に文武天皇今年九月行幸おりて、十月に還御し給ひし事見えたり、

志貴皇子御作歌

葦邊ゆく鴨の羽がひに霜ふりて寒きゆふべへ大和しおもほゆ

羽がひは鳥の左右の翅を打交へたるをいふ、一首の意あきらかなり、

長皇子御歌

霰うつあられ松原住の江のおとひをとめと見れど飽かぬかも

霰うつは、あられ松原の枕詞、あられ〳〵と同音の詞を重ねたるなり、あられ松原は攝津住吉郡なり、松原の下にと字を添へて聞くべし、おとひをとめは顯宗紀に弟日僕是也を、おとひやつこらまろこれとよめり、こは意計弘計の二王の御兄弟の御事にて、おとひはおとゝひに同じ、こゝもはらからの少女といふ意なり、一首の意はあられ松原の景色と少女のうつくしきと、いづれも世に類なく、見れども〳〵飽かぬ事よとなり、

太上天皇幸于難波宮時歌

太上天皇は持統天皇を申す、

大伴の高師の濱の松がねをまきてしぬれど家ししぬばゆ

大伴のは高師の濱の枕詞、高師の濱は和泉大鳥郡なり、まきてしぬれどは枕として寢れどといふ意、まきては枕とするをいふ、一首の意は景色よき高師の濱の松が根を枕として寢たれど、なほ故郷の戀ひ慕はるとなり、

右一首、置始東人

旅にして物戀しぎの鳴く事も聞えざりせば戀ひて死なまし

初二句、卷三に旅に居て物戀しきにとあり、こゝはしぎといふ鳥の鳴くにいひかけたり、其鳴く聲をきゝて、いさゝか旅のうさを慰さむとなり、

右一首、高安大島

大伴の御津の濱なる忘貝家なる妹をわすれておもへや

家なる妹を忘れむやといふ意にて、上句は序なり、卷六にわがせこに戀ふれば苦しいとまあれば拾ひてゆかむ戀わすれ貝卷七に住の江の岸に寄るてふ戀わすれ貝などと見えたり、

右一首、身人部王

草枕旅ゆく君と知らませば岸のはにふに匂へさましを

知らませばは知りたらばといふに同じ、岸のはにふに、岸は住吉の岸、はにふは、はにのある地をいふ、はには黄土にて、いにしへは衣などを染むるに用ひたり、卷六に「白浪の千重にきよする住の江の岸のはにふに匂ひてゆかな」とあり、匂はさましをは染めたらむをといふ意、一首の意は君の旅立し給ふ事を知りたらば、住吉の岸の埴にて御衣を染めたらむものを、さて〳〵くちをしき事よとおもふ、

右一首、清江娘子進長皇子

太上天皇幸于吉野宮時、高市連黒人作歌

太上天皇、こゝは持統天皇を申す、

大和には鳴きてか來らむ呼子鳥きさの中山よびぞ越ゆなる

大和には、は藤原宮のあたりを指す、來らむは、ゆくらむなり、きさの中山は大和吉野郡なり、よびぞ越ゆなるは鳴きて越ゆといふ意、一首の意は呼子鳥も藤原宮に行くにや、今きさの中山を鳴きて越ゆとあり、

大行天皇幸于難波宮時歌

天皇崩御し給ひて、いまだ御諡奉らぬ間を大行天皇といふ、こゝは文武天皇を申す、

大和戀ひいのねらにぬに心なく此洲の崎に鶴鳴くべしや

大和戀ひい故郷戀しくといふ意、いのねらえぬには寢ても眠られぬ意なり、一首の意は故郷戀しくて、よくも眠られぬに、鶴の鳴くを聞きて、いよ〳〵物悲しければ、此宿近くに心なく鳴きそとなり、

右一首、忍坂部乙麿

玉藻苅る沖へは漕がじしきたへの枕のあたりわすれかねつも

玉藻苅るい沖の枕詞、しきたへのは枕の枕詞、一首の意い旅寢する浦の景色のわかねば、沖へは漕ぎ出でじとなり、

右一首、式部卿藤原宇合

長皇子御歌

わぎもこを早見濱風大和なる吾をまつ椿吹かざるなゆめ

早見は豊後速見郡なり、我妹子を早く見むといひかけたり、吾をまつは松に待を

いひかけたり、吹かざるなゆめは吹かずにあるな、ゆめ怠らず吹けといふ意、ゆめ

は勤の意にて、卷三に「浪たつなゆめ」とあり、一首の意は我妹子を早く見むと思ふ心を告げやらむとおもへば、濱風よ、とく吾を待つ松椿に吹きて、おとづれせよとなり、松椿といふに妻をこめたり、

大行天皇幸于吉野宮時歌

大行天皇、こゝも文武天皇を申す、

みよしの、山のあらしの寒けくにはたや今宵も我ひとり寢む

はたやは又やといふに似たり、一首の意かくれたるふしなし、

右一首、或云天皇御製歌

うぢま山朝風寒し旅にして衣あすべき妹もあらなくに

うぢま山は大和吉野郡なり、これも一首の意いとあきらかなり、

右一首、長屋王

和銅元年戊申天皇御製

天皇は元明天皇を申す、さてこゝに寧樂宮御宇天皇代の七字あるべきなりと契沖いへり、

丈夫の鞆の音すなりものゝふのおほまへつぎみ楯たつらしも

鞆は弓射る時、左の臂につくる具なり、ものゝふのおほまへつぎみとは、武將をいふ、楯たつらしもとは、楯を並べて調練するならひとなり、さて此御時、陸奥越後のえみしらが叛きぬれば、うての使を遣さる、其御軍の手ならしを京にてあるに、鼓吹の聲、鞆の音など、かしかましきを、きこしめして、御位のはじめに事あるを歎きおもはす御心より、かくはよみませしなるべし、此大御歌にさる事さては聞えねど、次の御答歌と合せて去るきなりと考にいへり、

御名部皇女奉和御歌

御名部皇女は天皇の御姉なり、

わが大君物なおもほしそすめろきのつぎて賜へる吾なけなくに

すめかみのつぎて賜へるとは、皇祖神より嗣々にゆづり給へる天皇の御位ぞとなり、吾なけなくにとい、吾なきにあらずといふに同じ、一首の意は、皇祖神より嗣々にゆづり給へる我天皇の御位におはしませば、物なおぼしそ、御代にいかばかりの事かあるべき、もしゆゝしき御大事ありとも、吾あるからは、いかなる御事にも代り仕へまつらむと申なぐさめ給ひしなり、卷十三に「わがせこは物なおぼしろ事しあらば、火にも水にも吾なけなくに」とある、似たるさまなり、

は劃り書にて第三句に置くなり、ゆめ〳〵わが一書の意は我妹子と早く見ひと思ふ心を告げやらばとぞいふは嵐風はとく吾を待つ松樹に吹きて、おとづれせよとなりは待といふに書くとうたり、

大行天皇幸于吉野宮時歌

けり天皇、かゝる天皇を申す、

みよしのゝ山のあらしの実けくにはげしや今宵も我ひとり寝む

はけしきは文やとにたゝかひなり一首の意かくれたるらしなし、

右一首或云天皇御製歌

うちなる山朝風寒し旅にして衣うすべさ妹もあらなくに

うちなる山は大和吉野郡なりてれる一首の意ひとわさちかなり、

右一首長屋王

和銅元年戊申天皇御製

天皇は元明天皇を申す、さてこゝに萬葉宮御字天皇代の七字あるべきなりと

賀茂にくら、

丈夫の靫の音すなり物のふのおほまへつぎみ横たつらしも

靫は弓射る時、左の臂につくる具なり、ものゝふのおほまへつぎみとは、武將をいふ、楯たつらしもとは、楯を並べて調練するならむとなり、さて此御時、陸奥越後のえみしらが叛きぬれば、うての使を遣さる、其御軍の手ならしを京にてするに、鼓吹の聲、靫の音など、かしかましきを、さこしめして、御位のはじめに事あるを歎きおもはす御心より、かくはよみませしなるべし、此大御歌にさる事さては聞えねど、次の御答歌と合せて考るきなりと考にいへり、

御名部皇女奉和御歌

御名部皇女は天皇の御姉なり、

わが大君物なおもほしそすめこのみのつぎて賜へる吾なけなくに

すめかみのつぎて賜へるとは、皇祖神より嗣々にゆづり給へる天皇の御位ぞとなり、吾なけなくにとい、吾なきにあらずといふに同じ、一首の意は、皇祖神より嗣々にゆづり給へる我天皇の御位におはしませば、物なおもほしそ、御代にいかばかりの事かあるべき、もしゆゝしき御大事ありとも、吾あるからは、いかなる御事にも代り仕へまつらむと申なぐさめ給ひしなり、卷十三に「わがせこは物なおもほしろ事しあらば、火にも水にも吾なけなくに」とある、似たるさまなり、

和銅三年庚春三月、從藤原宮遷于寧樂宮時、御輿停長屋原、遥望古郷御作歌

一本には太上天皇御製とあり、長屋原は大和山邊郡あり、

とぶ鳥のあすかの里をおきていなば君があたりは見えずかもあらむ

とぶ鳥のは、あすかの枕詞、あすかの里をこのまゝにおきてゆきたらば、君のあたりは、もはや見られずやあらむ、さて〳〵名殘をしき事よとなり、

或本從藤原京遷于寧樂宮時歌

或本には此歌を藤原宮より寧樂に遷り給ふ時の歌としてありとなり、

すめろぎの　みことかしこみ　にぎびにし　家をさきりて
こもりくの　泊瀬の川に　船うけて　わがゆく川の
川くまの　八十くまおちず　よろづたび　かへりみしつゝ
たまぼこの　道ゆきくらし　あをによし　奈良のみやこの
佐保川に　いゆきいたりて　わがねたる　ころものうへゆ
朝づく夜　さやかに見れば　たへのほに　夜の霜ふり
磐床と　川のひてぶり　さゆる夜を　いてふことなく

かよひつゝ　つくれる家に　千代までに　いますむ君と
われもかよはむ

にぎびにしは、むつまじき意、卷三に「にぎびにし家ゆも出でゝみどりこの泣くをもおきて」とあり、家をさかりては家を離れての意、川くまは川のまがりめをいふ、八十くまおちずとは川隈は多かれども其隈々を洩さずといふ意、よろづたびは、あまたたびといふに同じ、たまぼこのは、道の枕詞、いゆきいたりてのいは添へたるにて、ゆき着く意、朝づく夜は曉の月をいふ、たへのほは拷の穂の如く白くといふ意、磐床と川のひてぶりは磐の如く氷れる意、ひは氷をいふ、氷室のひに同じ、てりは、こりかたまる意、こはりといふに同じ、一首の意は、天皇の詔をかしこまり奉り奈良の都に遷らむとて、むつまじく暮しゝ藤原の家を去りて、泊瀬川に船を浮べてゆくほどに、川のまがりめ〳〵をいくたびもかへり見つゝ、佐保川につきて、着て寢たる衣の上より頭もたげて見れば、霜白く降り、川の水は氷りて、さながら磐石の如し、かゝる寒き夜を休む事もなく、かよひて作れる奈良の家にゆきて、千代までもましまさむ君に、我も永く仕へむとなり、

反歌

あをによし寧樂の家にハ萬代に吾もかよはむ忘るとおもふな

今よりは永くしたしみかよはむに、うとぶる時あらひと、おもふなとなり、

右歌作主未詳

和銅五年壬子夏四月遣長田王于伊勢齋宮時、山邊御井作歌

長田王は長親王の御子なり、齋宮は天照太神をいつきまつる爲に、皇女を伊勢に置かせ給ふをいふ、其處への御使にとて、長田王を遣はされし時、伊勢の山邊といふ處の御井にてよませ給へるおり、

山のへの御井を見がてり神風の伊勢をとめどもあひ見つるかも

見がてりは見がてらに同じ、神風のは伊勢の枕詞、一首の意いとあきらかおり、

うらさぶる心さまねしひさかたの天の時雨のながらふ見れば

うらさぶるは心さびしき意、心さまねしはさは添音、まねしは多き意にて、心さびしき事の多きをいふ、卷十七に「たまぼこの道に出でたちわかれなば見ぬ日さまねみ戀しけむかも」卷十八に「月かさねみ戀ふるうらやすくしあらねば」とあり、ながらふは古は雨雪の降るを流るともいへり、下にもあり、るをのべてらふといふと考にいへり、

あれつみのおきつ白浪立田山いつか越ねなむ妹があたり見む

初二句、立田山の序言にて、古今集に「風吹けば沖つ白浪立田山」とある類なり、立田山はいつ越ゆるにか、此山を越えば、妹があたりは見ゆべきを、早く越えたしといふ意なり、

右二首今案不似御井所作、若疑當時誦之古歌歟

寧樂宮長皇子與志貴皇子於佐紀宮俱宴歌

寧樂宮にまします長皇子、志貴皇子と佐紀宮にて俱に酒宴し給ふ時の歌なり、佐紀宮は大和添下郡にあり、續日本紀に添下郡佐貴郷高野山陵、神名帳に添下郡佐紀神社とあり、

秋さらば今も見るごと妻ごひに鹿なかむ山ぞ高野原のうへ

秋さらばは秋になればといふ意、今も見るごとは今見る如く行末もかはらじといふ意、卷二十に「はしきやし今日のあろじは磯松の常にいまさね今も見るごと」とあり、妻ごひに云々、志貴皇子を常にこひ迎へて遊せむてふ事を、鹿の妻ごひに添へ給ふならむ、且こゝに住初め給ふことぶきもこもれりと考にいへり、

41
93

萬葉集講義卷一終

國文講義

41
93

205333-001-1

41-93

万葉集講義　巻1，3

佐々木　信綱／著

［刊年不明］

EDV-0511

41
93